

「第2次二宮町健康増進計画・食育推進計画・自殺対策計画（案）」に対する意見募集の実施結果

募集期間：令和7年1月6日（月）～令和7年2月5日（水）

意見提出人数：8人（窓口4人、郵送0人、電子メール3人、電子申請1人）

意見数：14件

パブリックコメントの意見及び町の考え方について

番号	項目	意見内容	町の考え方
1	<p>計画案資料について</p> <p>（3）町内における施設等について ①スポーツ施設利用者数の推移</p>	<p>パソコンの関係なのか比較に使用する表の色分けが不一致ではないですか。</p> <p>廃止してしまった温水プールを計画に記載して今後の比較も出来ないのに不要ではないですか。</p> <p>令和4年度、温水プール利用者の32,808人は運動する場所を失っています。コロナ禍により利用者数が戻らないうちの令和4年ですから49,295人と考えて良いかもしれません。この計画を策定するなら廃止により運動場所を失った方々へ代替を示してください。</p>	<p>WordからPDFに変換する過程で、グラフの凡例（模様）が適切に反映されていませんでした。最終版は適切に反映される方法で、変換するようにします。</p> <p>スポーツ施設利用者数の推移については当初記載していましたが、パブリックコメントの案では、既に削除し、記載しておりません。</p> <p>温水プールの代替としては、41ページの「2身体活動・運動」で町民の取り組みや町の取り組みに記載しています。プールでなくても陸上でできる運動を普及啓発していきます。</p>
2	<p>12ページ</p> <p>（5）自殺者の状況について</p> <p>②性別による比較</p> <p>②～④</p>	<p>男性が多いという、原因を十分に調査する必要がある。</p> <p>若年層、家族があり、職もある方が自死を選ぶというのは高ストレスがあると感じる、ストレスを開放する、家庭の相談、カウンセリングの充実が必要ではないか。</p>	<p>県や国と比べて、二宮町の「男性」が顕著に高いという訳ではありません。（統計学的にみても優位な差はみられません。）</p> <p>自殺の原因は様々で、複雑な要因が絡み合っているため、追い込まれる前に相談できる体制・周りの人々が気づける体制の構築に注力する計画となっています。</p> <p>そのため、様々な分野・領域で相談窓口を</p>

		<p>新規で対策が取られると計画にありましたが、さらに自殺防止条例を制定し自殺予防・相談の重点期間を設けより広く周知をしたほうが良い。</p> <p>健康診断の受診時に心の健康についても問いと対応を示してはいかがでしょうか。</p>	<p>設け、相談体制の充実を図るとなっています。(58～59 ページ)  いのちの相談窓口の普及啓発を行っていくとともに対応時には医療機関等地域と連携しています。</p> <p>条例制定については近隣の状況も確認していきますが、自殺予防・相談については、自殺予防週間及び自殺対策月間を重点期間として普及啓発に力を入れています。</p> <p>健康診断は年に1回しかないため、常日頃相談があれば相談できるよう、心の健康や相談窓口等について普及啓発していきます。</p>
3	<p>52 ページ  7 持続可能な食を支える食育の推進</p>	<p>町の取り組みとして「無添加食品や無農薬野菜等の使用を推進していきます」と入れてくださったこと、とても嬉しく思います。  ますます子どもたちが元気になる給食へ、そして二宮町の環境に配慮した農業の取り組みが広まることを願っています。</p> <p>数値目標の中で、①学校給食で使用する地場産食材（神奈川県産、二宮産）の品目数の増加」という項目がありますが、ここに無農薬野菜や無添加食品についての項目も加えてはいかがでしょうか。  またその際に、品目数ではなく、パーセンテージ（使用率に占める割合）としたほうが、指標として良いのではないかと思います。品目数の増加を目指すことは、バリエーションを増やすことにはつながるかもしれませんが、食材の「積極的な使用」へとつなげるためには、使用率を上げることこそ目指すべきではないでしょうか。</p>	<p>53 ページ 町の取り組み  学校給食における地場産物及び無農薬野菜等の活用の「無農薬野菜等の活用」を「環境に配慮した食材等の活用」に変更します。</p> <p>内容の「無添加食品や無農薬野菜等の使用」を「アレルギーに配慮した無添加食品や環境に配慮した食材」に変更します。</p> <p>また、町内の全ての学校給食をまかなう必要があるため、数値目標の指標に加えることは適切ではないと考えます。</p> <p>年間の品物数が多すぎてパーセントでの比較は現実的ではないため、品目数の増加を目指していきます。</p>

4		消費活動と食は密接に結びついていると考えています。スーパーなど私たち町民が食材を購入する店舗において、県産や国産のもの、無肥料無農薬のものを取り扱うことを、推薦する取り組みをしていただきたいと思います。	52 ページの町民の取り組みにもあるように、食材の選択や知識に関して実践できるよう、町も啓発を行っていきます。
5		「17 持続可能な食を支える食育の推進」の項目をいれてくださりありがとうございます。現状の国の自給率という観点から見ても、これから地産地消を推進し町民の食を守っていくことは必須だと思いますので、ぜひとも推進していただけたらと思います。 ・その上で、食品の選択や知識に関し、無農薬野菜や無添加食品のものの選択を推進することはとても重要なことと考えますが、一方でそれ以外にも、ゲノム編集や遺伝子組み換え食品の問題も存在します。 なるべく地場で新鮮で旬のものを使い、安心安全な背景がわかる食材、地球環境に配慮した食材、安全な食の選択ということであれば、ぜひともそれらのことについても内包いただけたらと思います。	町が考える「持続可能な食を支える食育」とは、食への感謝の気持ちや食品ロスの削減・環境に配慮した食への理解を深め、食を選択する力を修得し健全な食生活を実践することです。 この考え方を 52 ページに記載します。
6		・学校における食育では給食センター見学や栄養士の指導だけでなく、ぜひとも農家さんの現場を訪れたり自分たちで育ててみる生の体験に関しても推進いただきたいなと思います。子どもたちの郷土愛、自然を愛する心、食べ物への関心の醸成にもつながると思いますし、地域における「持続可能な食」というのは、そもそも生産者さんがいなければ成り立たないものでもあるため、この点はとても重要であると考えております。	53 ページ 学校における食育の推進にあるように、小学校の総合的な学習の時間において、お米作りや地域の方と連携して玉ねぎ作りを実施しているところです。その他の作物については教育活動のねらいに合わせて各学校にて判断していくことになります。
7		・子どもたちだけでなく、現代病とよばれるものを避けるためにも、旬の野菜や魚を使った”まごわやさしい”と称されるような食材や発酵食品などを使った伝統的な和食を推進することも、食育において大事なことだと思います。日本の食文化の継承にもつながると思いますので、ぜひとも取り組んでいただけたらと思います。	52 ページ 町民の取り組みにあるように、食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身につけ、食文化を継承していきます。

8		<p>「持続可能な食」は「持続可能な農業」とも言い換えられることでもあると思います。すぐには言わずとも環境保全型農業への移行は徐々に推進されるべきことであると考えます。それが、1000年続く二宮町にもつながっていくと思います。環境を守ることは、わたしたちの食を守ることにもつながると思うので、ぜひその意識で全市民の食や環境への意識を高めていけたらよいです。</p>	<p>町が考える「持続可能な食を支える食育」とは、食への感謝の気持ちや食品ロスの削減・環境に配慮した食への理解を深め、食を選択する力を修得し健全な食生活を実践することです。この考え方を52ページに記載します。</p>
9		<p>無農薬野菜等などの記載をしていただき、ありがとうございました。是非今後も続けていただき、町として予算を出し、持続可能性のある、農法を活用した新規就農農家を増やす試みを行ってほしいです。 (新規の農家を増やさないと、持続はむずかしいのでは?)</p>	<p>新規就農者になるための条件や農地のあっせんなどについては今後も周知していきます。</p>
10		<p>学校における食育の推進について、エディブルスクールヤードを実施してほしい。校庭の花壇などでも野菜などを作る体験等ができれば数値目標③の増加も見込むことができる。</p> <p>また、体験をしたことがあるだけにとどまらず、食の生産をしている自体を増やす方向性に向けてほしい。</p>	<p>53ページ 町の取り組み 学校における食育の推進にあるように、小学校の総合的な学習の時間において、お米作りや地域の方と連携して玉ねぎ作りを実施しているところです。その他の作物については教育活動のねらいに合わせて各学校にて判断していくこととなります。</p> <p>新規就農者になるための条件や農地のあっせんなどについては今後も周知していきます。</p>
11		<p>学校の教育活動の中で田んぼや畑に触れる機会を増やすこと。それを自分たちで収穫調理すること。小学校だけでなく中学校でもそんな機会が増えるといいなと思います。ICT教育が普及して家庭でも学校でも体を動かさず、座って画面をながめる機会が増え、五感を使って物事を学ぶチャンスが少なくなっているように感じます。子どもたちには暮らしの中自らの手足を使って学んでほしいです。そうすればおのずと食育・健康増進につながっていくような気がします。</p>	<p>53ページ 町の取り組み 53ページ 学校における食育の推進にあるように、小学校の総合的な学習の時間において、お米作りや地域の方と連携して玉ねぎ作りを実施しているところです。その他の作物については教育活動のねらいに合わせて各学校にて判断していくこととなります。</p>

12		<p>無農薬等の記載も趣旨には賛同で、とてもありがたいのですが、無農薬というのは農業の世界では存在せず、「栽培期間中農薬不使用」という表記になるそうです。(隣の畑が農薬使用していたりすることもあるため)  また今後10年間は、ゲノム編集や遺伝子組み換え作物なども使用の選択を迫られることもありますが、そういった物も含めて使用されないよう、無農薬を含むような総合的な表現とし、今後その基準や認定制度の設置が必要だと考えます。</p>	<p>53 ページ 町の取り組み  学校給食における地場産物及び無農薬野菜等の活用の「無農薬野菜等の活用」を「環境に配慮した食材等の活用」に変更します。  内容の「無添加食品や無農薬野菜等の使用」を「アレルギーに配慮した無添加食品や環境に配慮した食材」に変更します。</p> <p>基準や認定制度の設置については町として予定はありません。</p>
13		<p>p53 数値目標①について  地場産食材が10→14品になることも、もちろんありがたいのですが、多様な品種であることよりも先に、地元の農家さんたちに負担のないかたちで使用量が増えることが大切だと思います。  そのため、数値目標は、地場産および持続可能な環境に配慮し、地域循環や在来生物の多様性を促進する食材の使用割合の段階的引き上げ(重量ベース、金額ベース)などはいかがでしょうか。</p>	<p>数値目標①は「学校給食で使用する地場産食材と環境に配慮した食材の品目数の増加」に変更します。数値目標については、農家の方の負担のない回数とします。</p>
14	41 ページ 2 身体活動・運動	<p>行動目標：日頃から気軽に身体を動かし、運動を習慣化しようとはありますが、一日の大半を学校で過ごし、放課後は塾に通うような現代の小学生にいつ気軽に運動をする機会があるのでしょうか。  座り病をご存知でしょうか。子どもも移動が増え、日頃から気軽に身体を動かすためには、学校以外の時間ではなく学校の中でそれができるようにするのが一番だと考えます。  具体的には  ・昇降機を導入する。(座る時間を減らす)  ・校庭を芝生にして裸足で走り回れるようにする(体をつくる)→それと同時にその時間(休み時間など)を増やす。  ・学区外通学を認める(学区内だと家から学校をが近すぎる場合も学区外を認めれば少し遠い学校を選ぶことも可能になる。＝歩く距離が増やせる)  思うところいろいろあるとは思いますが。。  子供たちの健やかな心と身体とからだのためには日常を変える。＝一日の大半を過ごす学校を変えていくしかないと思います。親や家族はもちろんですが、学校＝座る場所という環境を変えていくことを求めています。</p>	<p>66 ページ ライフステージ別の取り組み  2 学童思春期(7歳～19歳)の主な取り組みに「体育や部活、遊びを通して身体を動かします」とあります。学校教育の中だけでなく、家庭の中でも遊びを通して、身体を動かす取り組みを啓発していきます。</p>

